

書評

田窪恭治・高階秀爾・水島尚喜・永田佳之・聖心女子大学／三元社

《黄金の林檎》の樹の下で アートが変えるこれからの教育

永守基樹（和歌山大学名誉教授）

■本書の概要

A4 判変形・88 頁の手に取りやすいサイズで、丁寧につくられた美しい本である。多くのカラー図版も楽しい。アートと学びの出会いと、それが開く共生の学びへの著者たちの思いが、美しいかたちになって出版されることは、喜ばしいことだ。

そのアートと学びの出会いの中心に、表題にもなっている、田窪恭治氏の、《黄金の林檎》と題されたモザイク壁画（高さ 6m×幅 13m）がある。この壁画を主人公として、著者たちが語る「林檎」の物語は精妙に響き合い、「共生」「持続可能性」「多様性」などをめぐるアートの可能性を豊かに広げている。その語り口は平明で親しみやすい。幅広い読者を得るであろうが、ここで問いかけてられていることは、今日の美術教育の本質的な課題でもある。



本書の概要について「はじめに」のなかで編著者である永田佳之氏の記述を引いてみよう。

「本書は、壁画の完成を祝して研究所が主催した「『黄金の林檎』完成記念シンポジウム 自然との共生 古今東西」（二〇一七年六月二三日開催）の報告書をもとに、書き下ろし原稿を加えて編集したものです。田窪恭治氏が制作工程や作品への思いを語った第一章、日本を代表する美術史家・高階秀爾氏が「林檎」というテーマのもとに歴史に残る名作について説き、絵画史上に《黄金の林檎》を位置づけた第二章、本学で造形美術教育を担当する教員の水島尚喜氏が「共生」と「アート」について「子ども」を通して語った第三章、「これからの教育」をテーマとしたパネル討議の第四章に加え、「黄金の林檎」に至るまでの経緯を巻頭コラム「『黄金の林檎』誕生以前」として加筆し、最後に「社会への拡がり」として壁画のもとでおこなわれてきた教育活動を紹介する章も加えました。」

このように、簡にして要を得た紹介である。筆者が付け加えることは、永田氏が「グローバル共生研究所」の副所長であり、いくつかの国際機関でのキャリアを持つオルタナティブ教育の研究者であること。また、著者にはこのプロジェクトの推進者である「聖心女子大学」の名前もクレジットされていることであろう。

■各章の有機的な結びつき／書評の観点

さらに付言すべきは、各章が有機的な緊密性を強く持っていること。それは、四名の著者が、それぞれに深い信頼で結ばれているからのようだ。永田氏はノルマンディーにて、高階氏は倉敷にて、水島氏は陸前高田にての、田窪氏との邂逅をそれぞれ語っていて、著者達の浅からざる絆を感じさせる。この絆のありようからも察せられるように、本書の主人公は《黄金の林檎》の樹であり、主役は田窪氏なのである。

というわけで、本稿でも「主人公」と「主役」に焦点をあて、他の著者たちの論議を適宜に関連させながら、本書において示された「アートが開く学びのかたち」を考えてみたい。

少々偏った書評になってしまうかもしれないが、既に「大学プレスセンター」の HP※には、手際よい紹介・解説が掲載され、『教育美術』誌の 2021 年 6 月号には藤江充氏の「文献紹介」が予定されていると聞く。必要に応じて参照頂ければ幸いである。

■田窪恭治の「場所」と「普遍」

美術家・田窪恭治の名前と作品を筆者が知ったのは「ポストもの派」の代表的作家としてであった。

だが、その名前を大きく広めたのは、1989 年に始まった仏・ノルマンディーでの「サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂再生プロジェクト」であろう。

田窪氏は、サン・マルタン・ド・ミュー村に家族とともに 11 年にわたって移住し、なかば壊れかけていた礼拝堂を再生。その内部に林檎の樹の壁画を描いた。

このプロジェクトの経緯を綴った田窪氏の著作『林檎の礼拝堂』（集英社 1998）を読みながら、私の脳裏には、何度も「ゲニウス・ロキ」と「ヴァナキュラー」という言葉が浮かんだ。この二つの言葉は、建築史家の鈴木博之氏が、ポストモダニズムの建築を論ずるときに援用したもの。普遍的に機能する機械のような近代建築から、場所に特有な建築へ。場所が持つ歴史的・文化的文脈から生まれる建築へ。このような動きを象徴する言葉として、「ゲニウス・ロキ＝土地の守護神」、あるいは「ヴァナキュラー＝地霊」という言葉が使われたのである。

モダンアート、とりわけフォーマリズムのイデオロギーから脱却することは、この時代の多くの美術家にとっての課題であったが、田窪氏はゲニウス・ロキに導かれるようにノルマンディーに家族とともに移住し、村人たちの対話—ヴァナキュラーには「口語体」という意味もある—を重ねることによって、近代美術が持つ「変革=前衛」のイデオロギーから自由になったように筆者には思える。その自由を獲得していく過程で、田窪氏は林檎の木とも出会ったのであろう。

だがしかし、彼は父祖以来の村の住人でもなければ、ノルマン人の末裔でもない。かつてその礼拝堂が属していたという英国教会の信徒でもないだろう。再生された教会は、確かに土地の守護神に祝福されてはいるが、同時にかつての礼拝堂との、微妙なずれやはっきりとした断層、を見せる。そして、もちろん、このずれと断層が、この教会を現代に甦らせる力でもあるのだ。

田窪氏のノルマンディーでの生活を想うとき、筆者はある旅行家が語っていたことを思い出す。「世界中をずっと旅していると、最初はどこに行っても自分が異邦人＝エトランジェであることを強く感じるのです。でもしばらく旅行を続けていると、どこに行っても故郷のような気持ちになる。ところが、さらに旅を続けていると、世界中のどこに行っても自分が異邦人であるような気持ちになるんです。」随分と以前にカーラジオから流れてきたインタビューの切れ端である。しかしその言葉は、旅とは自由になるための方法、時として「絶対異邦人」にもなりうる術なのだ、と教えてくれた。

田窪氏は、ふと訪れた異邦人でもなければ、村人にとっての同邦人でもない。田窪氏は、おそらく「絶対異邦人」のような精神と感覚を持つことによって、さらなる自由を獲得したのである。それは、土地や風景に根ざすという「場所性」と、世界中のどこでも変わらぬ「普遍性」が矛盾無く同居することを可能にしているようだ。このアーティストによる「自由」の獲得こそが美術教育で教え、学ぶことの根底にあるべきものなのである。

■深い場所・感覚の場所

場所に固有なものを得るためには、辺りを逍遙し、土地に関わる人々と対話することからはじめればよい。しかし、その表現が普遍性を獲得するためには、場所や身体の深いところに知覚を沈めていく必要があるだろう。

田窪氏は、しばしば CORQ＝コルクと自身で名付けた鋼材ブロックを床に敷く。この鉄のブロックは「感覚細胞」とも名付けられているが、『黄金の林檎』の床にも敷かれていて、人々の感覚を足下へと導く。ジョルジュ・バタイユは「足の裏」を「頭」の対極にある欲望や感覚の場所として論じたが、床の「感覚細胞」によって「足の裏」が呼び覚まされ、そこから導かれた深い場所で、言葉にもなり難い対話—というより交感—が行われる。そのような感覚の覚醒—それは「学び」と言い換えても良い—の装置として、この作品は在る。

そしてまた、この深い場所は、あたかも深層心理のように、人々の共通的な感覚や共同の記憶を開くのである。

■地下の鉱脈と水脈—歴史と教育の文脈

林檎の樹の下には、時間=歴史の層があり、また様々な文化が地下鉱脈のように連なっている。この歴史と文化について語るのには、碩学・高階秀爾氏である。おそらく美術を愛好する日本人で、氏の著作に触れなかった人間は稀であろう。考えてみれば、その美術教育上の功績は類を見ない。高階氏は林檎をめぐる西洋美術史を面白く、またとても分かりやすく論じ、さらに田窪作品に流れる日本文化の特質を語る。

まず西洋美術史の流れから、三つの林檎が語られる。第一の林檎として旧約聖書のアダムとイブが食べた林檎を「罪のシンボル」、第二にギリシャ神話の「パリスの審判」でヴィーナスが勝ち得た林檎を「美のシンボル」。第三の林檎は近代科学を作ったニュートンの林檎やセザンヌが描いた客体としての林檎。そして世紀末の象徴主義などを引きつつ、田窪氏の林檎を第四の「生命のシンボル」として位置づける。

旧約聖書やギリシャ神話が、西洋文化に属し、ある意味で閉ざされたテキストであるのに対し、近代の科学や芸術の生み出した価値は、文化圏を超えた普遍性をもつことに注目したい。その上で高階氏は、日本の神道における自然との共生への志向が田窪作品にも流れていると語るのである。

なかでも、田窪作品が林檎の実だけではなく、幹・枝・葉をふくむ樹の全体を描いていることに重要な意味を指摘していることは興味深い。一神教の排他的な性格から、ホリスティックに全体を創設していくコスモロジカルなイメージの力を高階氏はそこに見たということであろう。

他方で、地面の下には水脈もある。水脈は様々に流れを作り、同時に水は根から吸い上げられ、樹木を育て、そして大気の中へ還り循環する。コスモロジカルなイメージの力を、この循環の中に見ていくのが、美術教育研究者である水島尚喜氏である。水島氏が本書で掲げる「子どもの共生的感性」は、ポップ・カルチャーと洞窟画を自在に往還し、世界各国の子供たちの絵の中に広がっていく。氏の柔軟で多彩な語りは、教育の本質が循環に

あることを教えてくれているようだ。

また、水島氏が先史時代の洞窟画と子どもの絵を並べて論じるという、いわば古典的な論じ方をしていることも興味深い。ある意味で「人間学 (Anthropologie)」的なアプローチであり、このような真正面からの論を出させる力を《黄金の林檎》は持っている、と言っても良いかもしれない。

■感覚の場所から始まること

先に触れたが、この《黄金の林檎》が導く深い場所は、感覚の場所でもある。この場所を経験することそのものが学びなのだ。水島氏は大学の中に新たに生まれたアート作品をどのように教育に活用するのかと問われて「まず具体的には、《黄金の林檎》を見に来てもらう。何よりも、体験してもらう。そこからすべてが始まりますので」と答えている。「本来、実際に「感覚する」という尊いものがあって、そこからすべてを立ち上げなければ社会というものは成り立たないはず」と続ける論は、美術教育者には当然のことと受け取られるかもしれない。が、《黄金の林檎》を前にしての言葉にはリアリティがある。水島氏が「あとがき」で紹介している小学5年生の下の言葉はそれを裏付けている。

「初めに見た時には、一つの木からたくさんのリンゴという命が生まれていると思いました。近くで見ると、リンゴもその周りの光や空気も、形のちがうたくさんの石のかけらからできていて、一つの命もたくさんの命からできているように感じました。」

子供達はモザイクに使われている自然石が、世界中から集められていることに深い関心を寄せると言う。

「一番濃い緑色の石は日本産の青葉、少し薄いのは中国で採れた石です。真っ白なものはギリシャのタソス島、それから少しグレーっぽい白い石はイタリアのカッラーラ、林檎の輪郭に用いた黒い石はアフリカのジンバブエ。世界中の石がここで共存している」と田窪氏は第1章で紹介し、ロジェ・カイヨワの『石が書く』を引き合いに出しつつ、その生命を越えた美を語っている。子ども達は、そっとモザイクの石たちに触れて、深く感じるができる、と水島氏は言う。アーティストと「鉱物の美」との共振は、子供達感覚にも届いたのである。

■全体性と重層性のなかに

他方、地上の林檎の樹の下や周囲でも、多くの学びが広がっている。田窪氏自身が大学で開いた授業実践は、自身の「風景芸術」を基本コンセプトに、「サステナブル・キャンパス」をテーマとしたPBL。《黄金の林檎》は、その学びを支えるイメージとして機能したであろう。

また学生たちの自主的活動として、《黄金の林檎》をイメージソースとした、来客の笑顔を集める参加型ワークショップも生まれた。その他、大学の表現系の授業の発表の場や、コンサートの場としても、《黄金の林檎》は空間に力を及ぼしているという。

アートがもたらした対話と触れあいは、その多様性、重層性、そして広がり特徴がある。アートが喚起するコミュニケーションが様々なモードと場で為され、繊細な感覚の震えから、高度な言語活動にいたる多層において共存、平行して行われるのである。ここで重要なことは、コミュニケーションが生まれること自体ではなく、コミュニケーションが当事者にとって、何か大切なもの、価値あるものを担っているということなのである。

言うまでも無く、このようなコミュニケーションを呼び起こす力を持つのは、優れたアートに限られる。本書の場合では、《黄金の林檎》が放つコスモロジカルな光がそれを可能にしているのだ。おそらく、田窪氏はノルマンディーの「現場」が孕む時間と空間のなかでモダンアートのイデオロギーから脱し、林檎の樹のイメージを形成していく作業のなかで、ある種のコスモロジーを得たと言えるのかもしれない。排除することに本質のあるイデオロギーから、包摂することに本質のあるコスモロジーへの展開。それは、地面の上での対話と、深い場所での交感を共存させる。そして豊かに多様な文脈を、この林檎の樹は包摂することができたのである。

■《黄金の林檎》が美術教育研究に示唆するもの

さて、本書が美術教育研究に投げかけている課題はおそらく二つある。第一には美術教育という営為にコスモロジカルなビジョンを再生することである。宗教学者の釈徹宗氏は比較文化論を援用して宗教を三つのタイプで論じている (cf. 『法然・親鸞・一遍』新潮社, 2011)。修行によって自らを変容させる「悟り型」、超越者に救われる形態の「救い型」、共同体をつなげる「つながり型」の三類型。類型論は誤解を招きやすいので、詳しくは原著にあたって頂くとして、筆者は美術教育にもこの三類型は援用可能ではないかと考えている。たいていの宗教は実のところこの三者を包摂しているのだが、美術教育がコスモロジカルな性格を持つときも同様である。「世界の深い場所に触れ、その真実の姿を探る術」「世界と自己を解放し救済する術」「他者を理解し、つながり、共生する術」。この三つの術＝アートを包摂するホリスティックな構想が求められているのだろう。

第二には、その学びの技法の階梯＝カリキュラムの開発である。感覚の学びとしての造形遊びも、対話による鑑賞も、いくつかの技法はあるにしても、学びの総体的なビジョンが脆弱であるゆえに、学びの基軸を明示することが難しい。《黄金の林檎》は、これらの課題探求への道を指し示しているようだ。

※:「大学プレスセンター」掲載文献紹介; <https://www.u-presscenter.jp/article/post-45810.html>